

11	海部	あま市立伊福小学校	イトウ チカ
分科会番号	7	分科会名	美術教育
			名前 伊藤千加

## 研究題目

おもいをもち、主体的に制作に取り組む児童の育成  
 ー深い学びを促す対話的活動を通してー

## 研究要項

### 1 はじめに

本校は、「他者とのかかわりを通して、自己肯定感を高める児童」の育成をめざしている。その一環としてSST（ソーシャルスキルトレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）を取り入れた話し合い活動に継続して取り組んでいる。その結果、コミュニケーション能力が高まり、豊かな人間関係を築いたり、仲間と学び合ったりする素地が養われてきている。昨年度より研究教科について検討した中で、これらの素地を生かした教育研究を図画工作科で行うこととした。

図画工作科の学習について5月に児童にアンケートを行った。その結果、多くの児童が図画工作科が「好き」「どちらかという好き」と答えた。その理由として「自分のおもいを形にできることが楽しい」「上手くできた時の達成感がよい」などが挙げられた。しかし、中には「何をつくるか悩む」という児童がどの学年にも存在した。授業観察をすると、多くの児童が意欲的に制作に取り組む中で、手が止まったまま時間を過ごす児童もおり「何をつくりたいのか」「どうやってつくればよいのか」考えがまとまっていない様子が見られた。また、「友達の作品を見ることは楽しいですか」という問いでは、およそ8割の児童が「楽しい」「どちらかという楽しい」と答えた。しかし、「自分の作品について紹介していますか」という問いでは、「どちらかという紹介していない」「紹介していない」と答えた児童がおよそ6割存在した。これらの結果から、児童につくりたい「おもい」をもたせ、鑑賞活動を充実させていくことが課題であると分かった。

そこで、本年度は「題材への理解を深めるための導入の工夫」と「自己のおもいを知り、つくる喜びを感じられる鑑賞活動」の研究を進めていきたい。題材との対話、自己との対話、他者との対話を通し、造形活動をより活性化させることが児童の「できた」という達成感を生み、図画工作科の学習を通して自己肯定感の育成にもつながっていくと考える。

学習指導要領では、「図画工作科の学習は、自らの感性や想像力を働かせながら、資質、能力を発揮して表現や鑑賞の活動を行い、つくりだす喜びを味わうもの」と記されている。感じたり味わったりしたことを基に、主体的に制作に取り組む児童の育成をめざしていきたい。本研究が児童の豊かな心を養い情操を育み、よりよい生活を送るための土台作りとなるように願い、研究を進めていく。

### 2 めざす子ども像

「おもいをもち、主体的に制作に取り組む児童の育成」を踏まえ、めざす子ども像を設定した。

- ① 自らのつくりたいおもいを広げて主体的に制作に取り組む子
- ② 他者との関わりを通して、自らのつくりたいおもいに気付いたり、自分の作品や自己の価値を実感したりできる子

### 3 研究の仮説

めざす子ども像の実現のために、次のような仮説を立てた。

仮説1 取り組む題材のおもしろさに気付いたり、深く題材を理解したりすることができれば、つくりたいおもいをもち、自ら創造しようとする態度を育てることができるであろう。

仮説2 対話的活動の中でつくりたいおもいを明確にしたり、作品のよさを見つけたりすることができれば、つくりだす喜びを味わうことができるであろう。

### 4 具体的な手だて

#### (1) 仮説1への手だて

【手だて①-1】 導入における題材との出会いの工夫

【手だて①-2】 「おためし」の実施

【手だて①-3】 教科書資料の活用の促進

めざす子ども像①の実現を目的として仮説1を設定した。その手だてとして、児童のつくりたいおもいを高めるために、取り組む題材のねらいを意識した教材研究を行う。導入では、言葉選びを工夫したり、題材の内容を少しずつ伝えたりすることで、児童が題材に興味をもてるようにする。また、制作に入る前に「おためし」の時間を設け、児童が題材の特性を理解し、主体的に制作に取り組めるようにする。他にも、教科書資料の二次元コードを活用して多くの参考作品を見られる機会をつくる。児童が自分のタブレット端末で自由に確認したり振り返ったりでき、最後まで意欲をもって制作に取り組めるのではないかと考える。

#### (2) 仮説2への手だて

【手だて②】 鑑賞活動の充実

めざす子ども像②の実現を目的として仮説2を設定した。その手だてとして、自らのつくりたいおもいに気付けるように中間鑑賞で対話活動をすることで他者の視点を取り入れる場面を設定する。互いの作品に触れ合う中で、新しいアイデアや表現方法を知り、造形活動を深めていく場面にしていく。他にも、友達作品を見るだけでなく、自分の作品を紹介する場면을積極的に取り入れることで、作品について振り返り、制作の達成感を再確認できる時間にする。

### 5 研究計画

#### (1) 対象学年 全学年

#### (2) 計画予定

10月～2月	研究教科の検討・基盤となる授業実践
4月	研究内容の検討
5月	図画工作アンケートの実施、授業実践、授業検討会
6月～7月	授業実践、授業検討会
7月	図画工作アンケートの実施、授業実践の分析
8月	中間検討
9月～2月	授業実践、授業検討会
3月	研究のまとめと今後の課題

### 6 研究の実際と考察（実践と検証）

#### (1) 6年生の実践「この筆あと、どんな空？」（4時間完了）

本題材は、有名な画家の空を描いた作品を鑑賞した上で、自分なりの空を描くというものである。

導入では、児童の興味を引くために作風の特徴が強いゴッホの「星月夜」を中心に授業を行った【資料1】。作品を白黒に加工した状態で一部分のみ拡大して提示し、徐々に見せる範囲を広げながら鑑賞させた。何に見えるかと問いかけると、「うずまき」「花火」「ブラックホール」など、児童は何が描かれているかささまざまな予想を立てていた。その後、元の色彩に戻した作品全体を見せることで児童の作品への興味を高めてから「おためし」に入った【手だて①-1】。



【資料1 導入用写真】

鑑賞した作品のイメージを広げるために言葉で表す活動を行った。すると「ぐるぐる」「大きい」「ちょんちょん」などさまざまな言葉で表すことができた。その後、より児童の気持ちを高めるために「伊福小のゴッホになろう」と伝え、授業者が実際に描く様子を大型テレビで共有した。「ちょんちょん」という意見が出たから筆を小刻みに動かして描いてみよう」と話しながら描くことで表現の意図を全体で共有しながら描き進めた。どの児童も抵抗なく制作に取り組むことができるように絵の具の色は作品に使用されている5色を指定し、はがきサイズの画用紙を用意した。また、児童が不安感を抱かないように「おためし制作なので、完成しなくてもよい」と言葉をかけながら制作を行った。すると、どの児童も例を参考にしながらゴッホ風の筆あとを再現しようと筆づかいを工夫する姿が見られた。その後、「おためし」の作品に画用紙で作った枠を付け、黒板に掲示した。「おためし」なので最後までやり切れていないものもあるが、枠を付けたことで一つの作品として鑑賞できるものが出来上がった。つくることに苦手意識のある児童もつくる楽しさを味わうことができた【資料2】【手だて①-2】。



【資料2 おためし作品を鑑賞する様子】

本制作では、ゴッホ以外の画家が描いた作品も鑑賞するために教科書資料を活用した。空を描く活動の中でも、季節や時間帯の違いや、絵の具と水の使い方を工夫することで表現の幅が大きく広がることを確認することができた。児童の作品は、すっきりとした青空を描いたり、夕焼けの様子を淡い色合いで描いたり、稲妻が激しく光っている様子を鮮やかな色使いで描いたりしたものなど、個性豊かな作品が出来上がった【資料3】【手だて①-3】。



【資料3 空を描く様子】

本実践により、題材との出会いの工夫や「おためし」の取組は、児童の造形活動を活性化させることができることが分かった。さらに、自己のおもいやつくりだす喜びを味わうことができるように、鑑賞活動の充実を図った授業実践を進めていく。

## (2) 5年生の実践「まだ見ぬ世界」(5時間完了)

本題材は、児童が好きな写真を選び、その写真の外側の世界を想像して描くというものである。児童が見通しをもって制作に取り組めるように、制作に入る前に「おためし」の時間を設けて授業を進めた。

導入では、「まだ見ぬ世界」という題材名を一文字ずつ板書し、児童にどんな題材なのか予想させながら授業を始めた【手だて①-1】。

「おためし」では、児童全員に同じ写真を使って取り組ませた【資料4】。イメージを広げるために写真から連想される言葉を考えさせたところ、「こどもの日」「ひらひら」「カラフル」など、たくさんの言葉で表すことができた。その言葉を基に授業者が実際に例を描く様子を大型テレビで共有した【資料5】。「こいのぼりがひらひら飛んでいく様子を描きたいから写真はワークシートの右下の方に貼ろう」「カラフルという意見が出たから、周りに色々な色のこいのぼりを描こう」などと話しながら



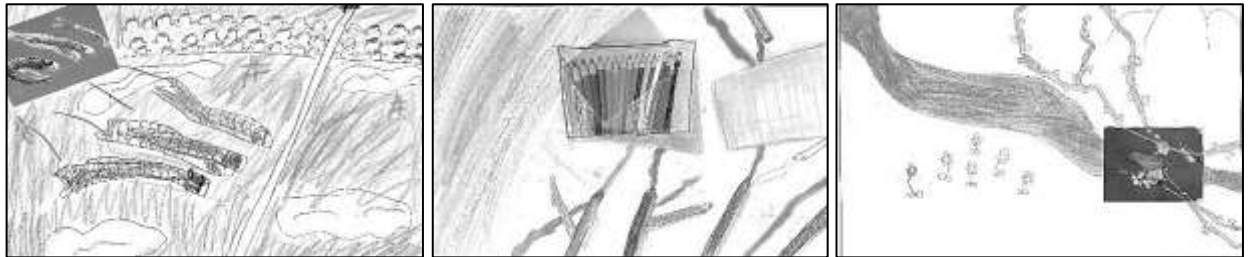
【資料4 おためし用写真】



【資料5 共有する様子】

ら描いていくと、児童からは「早く描きたい」と声が上がった。また、自分で発想を広げて描きたい児童のために、こいのぼりの写真だけでなく他2種類の写真を用意して3種類から選べるようにした。写真をワークシートのどこに配置するかを考え、写真の外側に広がる世界を一生懸命想像する児童の姿が見られた【手だて①-2】。

こいのぼりが写真から飛び出して競争している作品や、色鉛筆が自由に動きまわる作品、小鳥が小川のほとりで休む作品など、それぞれのアイデアやおもしろい工夫が詰まった「おためし」の作品が出来上がった【資料6】。その後、互いの作品を机の上に置き、自由に歩き回って鑑賞し合う時間を設けた。同じ写真からでも、さまざまな発想や表現ができることを確認してから本制作に入った【手だて②】。



【資料6 児童の「おためし」の作品】

本制作では、児童に「心が動かされる写真を探そう」と伝え、それぞれの写真を用意させた。四つ切画用紙に写真の配置をする前にタブレット端末で教科書の二次元コードを読み取って参考作品を鑑賞させた【資料7】。たくさんの作品を見ることができ、児童は「すごい」「これいいな」と言いながら鑑賞していた。児童用タブレット端末を使い、制作の途中でも自由に参考作品を見ることができるようにしたため、表現方法やイメージを広げて制作する様子が見られた【手だて①-3】。



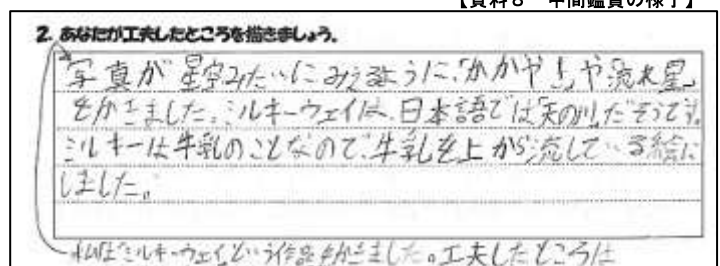
【資料7 参考作品を見てメモをする様子】

制作の途中では中間鑑賞の時間を設けた。その際、児童は自分の作品について紹介したり、友達作品に「この色いいね」「これは何？」など感想を伝えたり質問したりしていた【資料8】。友達と対話することで描きたいもののイメージがより広がったようで、今まで以上に集中して制作する姿が見られた。制作終了後の鑑賞活動では、工夫したところをワークシートにまとめた【資料9】友達と伝え合う活動では、感想などを伝え合った後に、作品の細かいところについて目を向けて楽しそうに会話する姿が見られ、それぞれの作品のよいところについて考えることができた【手だて②】。



【資料8 中間鑑賞の様子】

制作の途中では中間鑑賞の時間を設けた。その際、児童は自分の作品について紹介したり、友達作品に「この色いいね」「これは何？」など感想を伝えたり質問したりしていた【資料8】。友達と対話することで描きたいもののイメージがより広がったようで、今まで以上に集中して制作する姿が見られた。制作終了後の鑑賞活動では、工夫したところをワークシートにまとめた【資料9】友達と伝え合う活動では、感想などを伝え合った後に、作品の細かいところについて目を向けて楽しそうに会話する姿が見られ、それぞれの作品のよいところについて考えることができた【手だて②】。



【資料9 鑑賞のワークシート】

### (3) 1年生の実践「おって たてたら」(3時間完了)

本題材は、紙を折ったり切ったりして平面を立体に変える活動を楽しみ、思いついたものを工夫して作り出すというものである。

隣同士で「おためし」の作品を見合い、感想を交流させた。児童からは「王冠のギザギザに切った所がすごい」「家に窓や扉がちゃんと付いていて本物みたい」「家の中に動物が住んでいていいね、私もつくってみたい」という声が聞こえるなど、つくりたいおもしろを広げることにつながった【資料10】。友達



【資料10 感想を交流する様子】



作品を鑑賞したことで、友達の作品のよさや表現方法に気付き、自分の作品に生かそうという意欲を高めることができた【手だて②】。

また、教室の中央のスペースに全員の「おためし」の作品を並べると、児童から「まちみたい」と声が上がった。そこで、みんなの作品で何ができるか考えながら制作するように言葉がけをしてから、本制作に入った【手だて①-1】。

本制作では、友達の「おためし」の作品や友達が制作している作品を見たり、自分が制作している作品を中央のスペースに置いたりして、鑑賞と表現を行き来できるようにした。何をつくろうか迷っていた児童も、友達の作品からヒントを得て、制作に取りかかることができた。また、「これは、どうやって取り付けたの?」「これは、どう切ったの?」と友達に声をかけアドバイスをもらうなど、友達の作品のよさを取り入れ、意欲的に作品づくりに取り組む姿も見られた【資料11】。

鑑賞活動では、作品を置く位置や並べ方を話し合いながら出来上がった作品を中央のスペースに並べた。【資料12】。その結果、自然と似ている作品が集まり、児童は「こうやって並べるといい感じだね」「こっちから見るとおもしろいよ」と自分の感想を伝え合いながら作品の置き方を工夫していた。また、「ここは、道にしよう」「これを合体して並べると、王冠が塔に見えるね」と、よりよいものをつくろうとする様子が見られ、対話活動を通して、自分や友達の作品へのおもいがより膨らんでいる様子が見られた。「大きなまちみたい」「いろんな店があるから、商店街がいい」「おまつりみたいだね」「1ねん1くみのみらいだよ」と、学級全体で作り上げた作品へのそれぞれのおもいをうれしそうに話す姿が見られた【資料13】【手だて②】。

#### (4) 2年生の実践「しんぶんしと なかよし」(4時間完了)

本題材は、新聞紙を使って造形的な活動ができることに気付き、さまざまな作品をつくっていく。導入では「今からみんなには魔法を使ってもらいます」と伝えて授業を始めた。児童は「どんな魔法があるのかな」「何をするの」と次の活動への期待感を高めていた【手だて①-1】。

「おためし」では新聞紙1枚を使って作品づくりに取り組ませた。制作に取りかかる前に、新聞紙でできる造形的な活動について「〇〇の魔法」という言葉を用いて考えさせた。すると、「ひらひらの魔法」「あなあけの魔法」「まるまるの魔法」など、魔法という言葉を使ってさまざまな新聞紙の使い方を考えることができた【資料14】。「おためし」の作品の制作を始めると、児童はすぐに新聞紙を細長く破いたり丸めたりして、新聞紙という素材のおもしろさを楽しみ、思い思いの作品をつくっていた【資料15】【手だて①-2】。

その次に、互いのアイデアを共有するために中間鑑賞を行った。その際、どんな魔法を使ったか、その魔法を使うとどんなものができたのか伝えるために話型を示して対話活動を行った。「まるまるの魔法を使って望遠鏡をつくりました」「ぐちゃぐちゃの魔法を使って、りんごができました」など「魔法」という言葉を使い、それぞれの「おためし」の作品について紹介することで、新聞紙でできる造形的な活動について考えを深めることができた【手だて②】。



【資料11 友達の作品のよさを取り入れた作品】



【資料12 話し合いながら作品を並べる様子】



【資料13 「1ねん1くみ000」を話し合う様子】



【資料14 魔法を考える様子】



【資料15 「おためし」の様子】

本制作では、教科書の参考作品を見せ、体育館でたくさんの新聞紙を使って班で一つの大きな作品をつくることを伝えると「すごい」「つくってみたい」と声が上がった。何をつくるかの話し合いでは、教科書の参考作品を見ながら「家を建てるには上に新聞紙を立てた方がいいね」「柱をどんどんつなげれば大きくなるね」「この家に別のものをつけてみたいな」「いいね。テントもつくってみよう」とさまざまなアイデアを出し合う姿が見られた【資料 16】。「おためし」をしたことで題材への理解が深まり、より興味をもって本制作に取り組むことができた【手だて①-3】。



【資料 16 班で話し合う様子】

## 7 研究の成果

### (1) 仮説 1 について

導入で言葉選びの仕方や題材との出会わせ方を工夫することは、児童の題材への興味を引きつけ、つくりたいという思いを高めるために有効であった。鑑賞する作品を白黒にしたり、「魔法をかけよう」と呼びかけたりしたことをきっかけに制作への意欲を高めることができた。

また、「おためし」では、材料や道具、制作方法を指定し、教師が実際に描く様子を共有したことで、児童の「何をつくれればよいか」「どうやってつくればよいか」という戸惑いを解消し、造形活動を活性化させることができた。本制作に入る際も見通しをもって取り組むことができるので、題材を生かして何をつくりたいかという自己のおもいを深めることにつながった。

また、教科書資料を活用することで、どんな作品をつくれればよいか具体的なイメージを児童に掴ませることができた。タブレット端末で好きなタイミングで参考資料を見ることができるようにしたことで、制作に戸惑いを感じる児童に対して支援をすることができた。

### (2) 仮説 2 について

中間鑑賞で友達と対話することは、さまざまな表現方法や色や形のよさを知るために有効であった。友達に作品を褒められることで自信をもって制作に取り組むことができた。制作後の鑑賞活動で互いの作品について対話する中で「家族や他のクラスの友達にも見せたい」という声も聞かれるなど、作品への愛着と達成感を得ている姿が見られた。

## 8 今後の課題

今回取り組んだ導入の工夫や「おためし」の実施は、児童の不安な気持ちを和らげるために有効であった。研究を進める中で、児童から「頑張って考えたものが作品になることが嬉しい」「悩んだり、考えたりするのが楽しい」という声が聞かれるなど、悩みながら制作を進めることに肯定的な姿も見られた。今まで図画工作科の授業を行う際に、児童が悩んだり困ったりしている姿が教師の不安要素の一つであったが、今回の研究により具体的な手だてが分かり、悩んでいる児童にも安心して指導に当たることができた。全校で研究に取り組んだことで、教員間で効果的な指導方法を共有できたことは、今回の研究の大きな成果であった。

鑑賞活動では、授業では楽しそうに互いの作品を鑑賞し合う姿がたくさん見られた。研究の成果を実感するには、もう少し継続が必要であると考えられる。自分の作品や自己の価値を実感できる児童を育成するために、今年度に取り組んできた手だてを生かしつつ、より研究推進に努めていきたい。